

# (資料) 言葉の力

## —コリヤク族とチュクチ族の呪文—

荻原眞子

### はじめに

北東シベリアの原住民であるコリヤク族とチュクチ族に関しては、ヨヘルソンとボゴラスが、フィールドワークによる基礎的資料を遺している。[Jochelson, 1908; Bogoraz, 1904-1909] そして、この両民族には共通したシャマニズムの特徴が認められている。すなわち、家族シャマニズムと個人シャマニズムの別である。他の地域や

民族で、一般にシャマンの職域とされる病気の治療、占卜などがコリヤク族、チュクチ族では家族の誰か彼かによって行なわれ、必ずしも職業的な個人シャマンの専売特許ではなかった。家族のなか、特に年長者や家長の地位にあるものは太鼓を打ち、エクスターの状態に達して、病気の治療や種々の占トをなしたらしい。このような家族シャマンから区別される職業的な個人シャマンの特質は、後者が巫病と神靈の召命をへてシャマンになるという成巫過程にあると思われる。そして、この個人シャマンの社会的地位が、十分な基盤をもつて確立していたかどうかについてははつきりしない。といふのは、前世紀から今世紀の中ごろの間ににおいてさえ、さまざまに社会的、経済的な状況の変化に左右されて、事実とその解釈に異論があるからである。ただ、職業的なシャマンが腹話術やトリックにさきわめて秀でた技能を有していたことは二つの民族について共通している。そのような特殊技能は職業的なシャマンの社会的役割に重要な拠り所を与えたであろうと思われる。

ボゴラスは、個人シャマンは家族シャマンから生まれ、発展したものと推測している。確かに、家族シャマニズムは文化的、社会的基本盤であったと考えられる。しかし、そこには異民族からの文化的借用という可能性もあったのではないかろうか。いずれにしても、シャマンの存在の如何にかかわらず、人間の日々の生活と社会には解決しなければならない事柄はつきものである。人生や生活上の問題が、コリヤク族やチュクチ族では、職業的な個人シャマンではなく、家族によつてしばしば処理された。その仕方が學術上「シャマニズム」として知られた特徴を具えているばかりに、「家族シャマニズム」

ニズム」と称されではいるが、現実に、この家族シャマンが、どのような儀礼や場面でどのような役割を果しているのかを識ることは興味深い。そのため、本稿では、二つの民族について採録されている呪文を取り上げてみたい。コリヤク族の呪文には、ヨヘルソンが注釈を記しているが、チュクチ族の呪文のテキストについて、ボゴラスは、ほとんど説明をしていない。不明瞭な部分が少なくないが、それを明らかにするには、チュクチ族の信仰や儀礼などの精神世界へ深く分け入らねばならない。それは次の課題としたい。

#### コリヤク族とチュクチ族の呪文 (Incantation)

コリヤク族の呪文について、ヨヘルソンは次のように述べている。「呪文に関する信仰は、行事の進行が話された言葉に作用され、精霊たちはしばしばその言葉に注意を払う」ということ、あるいは呪文のテキストで触れられた行為は繰り返され、その場に当てはまるということにある。かくして病は癒され、護符や呪符は神聖なものとなり、食糧となる動物は引き寄せられ、そして悪霊は排除される。」[Jochelson: 59-60]

チュクチ族においても、呪文は儀式や儀礼のなかで肝要な位置づけを与えられている。

「通常は家族のうち年長者的一人が少なくともいくつつかの呪文を心得ていて、儀式をより効果的にするためにそれをもちいる。確かに不用意な人間のなかには呪文を唱えずに儀式を行なう者もあるが、この状態が続くのは何かの不幸が彼らのうちに生ずるまでである。

不幸は直ちにそのような無防備な状態のせいにされ、家族はシャマンかあるいは他の適当な人に頼んで将来のために呪文を入手しなければならない。」[Bogoraz: 469-470]

また、護符に呪力がそなわるもの呪文によってである。チュクチ族の話によれば「昔のお守りや呪物が非常に強力であるのは、長いあいだそれに対してかけられた数多くの呪文のゆえである。コリヤク族では呪物は時間が経つと力を失うので、それらに対して定期的に呪文を繰り返さなければならない。」[Bogoraz: 470]

呪文の内容についてみると、コリヤク族の場合には神話が起源であるという。すなわち、「すべての呪文は創造神 (Tennanto'mwan) に起源する。彼が呪文を人間に伝えたのは悪鬼カラウ (kalau) の戦いにおいて人間の手助けをするためである。彼とその妻のミチ (Miti) は呪文の内容をなすドラマティックな叙述のなかの登場人物である。」[Jochelson: 59-60] チュクチ族の呪文でもしばしば神話上の存在が口にされるが、呪文の対象は天空や自然のさまざまな事象であり、必ずしも明確な形象をもつた神話や宗教上の存在ではないように思われる。

呪文を唱えることは、それ自体が、呪術儀礼の意味をもつていて。そして、わたしたちにとっては、実際に思いがけない比喩や連想によって、チュクチ族やコリヤク族は病氣や事態の原因を解明し、解決しようとする。呪文の詞には、それを投げかける対象を人間の力の及ぶ範囲に取り込み、人間の意志に従って、その対象を自在に動かすことのできる非常に大きな力が込められているように見える。

このことは呪文のテキストに明らかである。かくして、チユクチ族のトナカイ飼養者にとってトナカイ飼養がうまくいくのは、その家畜の所有者のもつ呪文が強力で、その家畜の繁殖を保証しているからであるとみなされる。したがって「裕福な男はいろいろな人からトナカイ飼養に役立つ呪文を買い足すことに絶えず気を遣う。反対に貧しい男は愚かで、トナカイ飼養に運をもたらす呪文をもっていないのだ」と言われる。人は家畜が減っていくのは自分の呪文が力を失ってしまったからだと信じ、また、もし最終的に家畜を失くしてしまったなら、男は自分の呪文のいくつかを捨てたり、呪文の語順やそれに必要な仕草を忘れていくことによって残っている呪文を無くしてしまう。呪文はその持ち主をしてそれを失わせるのだと言われる。」[Bogoras: 470]

呪文についてのもう一つの重要な特徴は、それが個人的な性格をもち、有効な呪文は個人の所有に帰せられ、従って、呪文は、交換されたり売買されたりするという点である。コリヤク族では「呪文は代々伝えられるが、この技芸に通じた女性はみな自分の呪文を秘密にする。もしも、その秘密が漏れると呪文は効力を失う」。また、呪文が報酬の対象となることについて、呪文を生活の糧としている貧しい夫婦の例が記されている。「良い呪文は磚茶の数塊、煙草の数包みもしくは一頭のトナカイに値する。女性が、呪文を人に売る時には、彼女はそれを完璧に売渡す、そして買手がその神秘的な力の唯一人の持主になるのだと約束しなければならない。」[Jochelson: 60]

わいに、呪文がしばしば一人称叙述の形式をとり、何らかの動作を伴うことも注目すべきである。この一人称叙述の主体は、呪文のテキストから窺うかぎりでは、呪文を唱える当人であったり、また呼びかけて降下した神話上の存在や対象でもある。そして、チユクチ族ではその際に所作がなされることがある。またコリヤク族でも「女性たちは、呪文を唱える時には、「言葉を発すると同時に、そのなかに述べられる所作をする」（下線筆者）という [Jochelson: 60] が、その実際は詳かでない。

### コリヤク族の呪文

#### 1 一人旅の旅人を悪鬼（カラ）から守る呪文

創造神は「わたしの息子はきっとカラにさらわれてしまうだろう、彼は荒野で独り眠っている間にカラに連れ去られてしまうだろう」といて心配はじめた。そこで創造神は息子を排泄物に変えた。なぜならカラはその臭いを好みなかつたから。

いうして創造神の息子はぐっすりと眠り、無事に目覚めた。（この呪文には創造神の息子（すなわち旅人）は荒野で独り野宿しようとする時にこのように呪文をかけられ、実際に創造神によつて排泄物に変えられるのだという信仰が特徴的である）。[Jochelson: 60-61]

2 女性のための護符に呪力を与える呪文  
創造神は考へてから次のように言った。「わたしの病氣の娘

のために何をもってきたらよからう」。そこで彼はお守りを手

に入れ、娘のところへ持つて行き、精靈たちが彼女のところにやつてこないようになに彼女の身体の上にのせた。こうしてお守り

は精靈の来るのを防いだ。

(この場合は身体につけるものは何であっても護符となる。といふのはそれは呪文の効力によってカラウ (kala の複数形) の襲来を阻止する護符となるからである)。[Jochelson: 61]

### 3 頭痛を治す呪文

創造神は自分の娘が頭痛になるようにした。彼が荒野にいくと向こうにカラとその妻の二人を見かけた。前者は斧を、後者は女物のナイフをもっていた。創造神は一人をつれて家に帰ってきた。するとカラは斧で創造神の娘の頭をこつこつ叩きはじめ、カラの妻は娘の頭をそのナイフで切りはじめた。娘の母親のミチは創造神の妹のところへ行って、「わたしの娘の頭痛を呪文で治して下さい」と言った。創造神の妹は「創造神が自分で病氣を起こしているのだから、彼に治させなさい」と答えた。

そこで創造神は彼の娘の頭を斧で叩いていた者とナイフで切っている者と元の場所へ連れ戻した。その後創造神は暁の方角へ向かい、そこへ到着すると一人の女が住んでいた小さな家へやつてきた。その女は彼に一羽の兎をくれた。創造神はそれを家に持ち帰り、それで娘のために鉢巻きを作った。兎は叫び声をあげた。こうして娘の頭は治された。頭の切傷は塞がつ

た。毎日彼女は快方に向かい、完全に治った。

(ヨヘルソンの註釈では、創造神もしくは大ワタリガラス Big Raven の妹は女シャマンであるから、娘の頭痛の原因が父親自身だということを知っていた。また日の出の方角にいた女とは、この呪文を伝えた女性の説明によると太陽そのものである。太陽が創造神に娘を治すために兎を与えた。創造神は兎を持ち帰り、それを娘の頭のまわりに結んだ。兎は叫び声をあげ、その声で彼女の頭痛を治した。)

兎は重要なお守りであり、カラウに敵対する強力な動物と見なされている。文化英雄であるエメムクットがカラウの家の中に兎の頭を投げ込んでカラウを殺す話がある。また呪文の最中に兎の毛を切取った兎の身体の毛のなかに編みこむ。時には鼻とか耳の一部など兎の身体の一部分が護符を集めたお守り紐に結びつけられる)。[Jochelson: 61-63]

### 4 腕の腫物を治す呪文

創造神とミチの息子が「僕の腕が腫れてきた」と言った。創造神は妻に「ミチ、わたしのワタリガラスの上着と杖を取つてきておくれ」と言った。彼女はそれを持ってきた。創造神はそれを着ると、海へ出て行って、それを眺めわたした。そしてその果てまで行った。そこで彼はカモメと小さな兎に会った。両者は泣いていた。そしてその泣き声のために潮は下がり、岸は完全に干上がっていた。創造神は彼らに「あなた方は何のた

めに使われているのか」と尋ねた。彼らは「わたしたちは腫物のできた男のために、腫物の包帯に使われている。わたしたち二人が一緒に泣けば、腫れは引くのだ」と答えた。

そこで創造神は「わたしがあなた方一人を家に連れていこう」と言った。そこで彼は彼ら一人を家に連れて行き、彼の息子の腫物の上の包帯とした。彼らの泣き声によつて腫れは止まつた。それから彼らの泣いたことによつて腫れものはなおり、創造神の息子は元気になつた。

(このテキストではカモメと兎の泣き声が引き潮と腫物の引く原因となるという連想が明らかである。つまりカモメと兎の泣き声によつて海水が後退し、同じように彼らの泣き声によつて腫物も引く

といふ。包帯や呪符としては兎の毛やカモメの嘴などが用いられるが、それらは動物全体に取つて代わる) [Jochelson: 63-64]

## 5 脚のリューマチのための呪文

ミチと創造神の息子は両足が痛くなつた。そこで創造神はミチに言つた。「妻よ、わたしのワタリガラスの上着と杖を取つてきておくれ」。それから創造神は外へ出て、絶えず空を見上げていた。それから彼は曇の方へ飛んでいった。間もなく日の出の側にある大きな山が彼の目に入つた。彼はその山へ至ると、それを登りはじめ、とうとうその頂上へ上つた。そこには

“草”の一叢があつた。その草の節はすべて口を持つていて常にくちゃくちゃ囁んでいた。「あなた方は何に使われるのです

か」とそこで創造神は聞いた。“草”は「わたしたちの脚が痛みので、わたしたちは痛みを起こすカラウを食べるのです」と答えた。

創造神はその一叢の“草”を抜取り、家に持ち帰り、それで息子の両脚を縛つた。“草”は脚を這い上つてきて痛みを起すカラウを全部食べた。それで創造神の息子は脚の痛みがなくなり、毎朝起きるたびに良くなり、ついに治つた。

(いじに語られている“草”は Equisetaceae すなわち、トクサの類で、その節がカラウを食べる口であると見なされてい) [Jochelson: 64]

## チュクチ族の呪文

ボゴラズは36例の呪文を採録している。それらはトナカイ狩りの呪文、天候回復のための呪文、悪霊ケレトを阻止する呪文、家畜の群を疫病やオオカミから守る呪文、病氣治療の呪文、瀕死の人間を死から逃れさせたり、死者の再生をはかる呪文、人を陥れる呪文、愛の呪文、ワタリガラスの呪文、競歩で相手の力を殺ぐ呪文などである。[Bogoraz: 496-508]

ここには呪文や祈詞も含められているが、それらの効力は言葉の意味にあるのではなく、唱えて所作する際の定められた順序にある。そして呪文はいつも囁くような小声で発せられる。というのは石でさえ呪文を聴いて、それを自分のものとすることができる。そうなればその持ち主にとつては呪文は効力を失うからである。

[Bogoraz: 472-473]

(注) 1 以下のテキストではチュクチ族のインフォーマントは呪文の語と同時にその際の所作の仕方をも口頭でボゴラスには述べている。

2 本稿ではボゴラスの採録したうちの一部は割愛してある。

### 1 トナカイ狩りの呪文（川を徒渉するトナカイ狩りの呪文）

そもそも創造のはじめからわたしはすべての獲物、すべての生きものを呼ぶ。若いオナガガモをわたしはリーダーに使っているが、これは大変に賢くみんなから隠れている。わたしは年とったオナガガモをリーダーにすべく呼ぶ。あの離れ雄トナカイをわたしは川のなかへ進ませる。そうだ、それはリーダーにやらせてみよう。彼にトナカイの前で呼ばせよう。そこでわたしは「その調子、その調子、ところで、おまえさんは誰ですか」と歌う。わたしは（獲物まで）昨日の距離を使う、わたしは今日の距離を使う。わたしはそれをわたしの前に出現させる。わたしは顔を煤で隠す、どの獲物にもわたしは知らない、あらゆる類の生きものにとってわたしの正体は判らなくなる。わたしの顔の煤だけがかれらの目に入る。ズボンを脱ぎ、何の警戒もせずにわたしは地面に立つ。わたしの尻には三つの目があり、それがわたしの代わりに見張ってくれる。それらは隠れたケレをみんな見つけ、ケレの目をふさがせる。小さなオナガガモの尻のところで二つに分かれた一本の脚を使って、先頭のトナカイの歩みをわたしは緩める。わたしがずっと使っているものの臭いを

### 2 海獣狩りの呪文

狩人たちが舟で海に乗りだし、氷上に眠っているセイウチ見つけ、舟が周囲の小さな氷にぶつかって音をたてるときに、呪文を唱える男は次のように言う。「おお、セイウチよ、わたしはおまえの両耳を大きな平鍋にのせて、おまえさんがこのぶつかる音を聞かなくてすむようにしよう」。そうすると狩人たちには近づいて群ぜんぶを殺すことができる。[Bogoraz: 498]

### 3 悪天候を良くする呪文

a わたしは天と、風上に向かって大声で言う。「老婦人よ、あなたの小さな銅の肉切りナイフで空をすっかりこそげおとしてください。A huk! あなたは大きな乳房をもつていて。わたしは三回手をたたき、それからの後へ倒れる。わたしは左手を袋を右手にはめる」。おしまい。[Bogoraz: 498]

b 「西風よ、ここを見なさい。わたしの尻を見下ろしなさい。

かぐよとは難しい。何の警戒心もなくわたしはあらゆる場所の境界をこえて入る。わたしは心配せずに眠ることもできる。すべての獲物はわたしに好意をもち、あらゆる類の獲物は大いにわたしを好きになる。こうして私はぐっすりと安眠ができる。わたしの枕のしたにある物はわたしのお守である。それに息を吹きかけては、もとへ戻す。わたしはそれを下へまわ散らす。おしまい。[Bogoraz: 497-498]

わたしたちはおまえさんに脂身をあげよう。吹ぐのを止めなさい」。(この呪文を唱える男はズボンを下ろし、風下に向かって頭を下げ、裸の尻を風に当てる。一言ずつ彼は拍手をうつ)。

[Bogoraz: 498]

### 悪鬼（ケレト）を阻止する呪文

a. 夕方になると、わたしは「匹の大きな熊を入口のどちらか片側に縛りつけ、それから次のように話す。「おまえたちはとても大きくして強い。おまえたちの側からは悪いことはなにもわたくしに降りかかるない」。もしもケレトが入るとしても、熊たちが捕まるだらう、というのは彼らはとても癡猛だから。彼らの側を通り抜けたり、彼らがそこにいる間に襲うことは難しい。それからまたたくの間に鉄の鞭を持った小さなおばあさんがいる。わたしの戸口のそこかしこで彼女は夜中その鞭を振りまわしている。それはケレトを驚かせ、かれらが襲撃していくのを防ぐ。さらに「羽の大きな北極フクロウがこの家の周りの見張りにあたっている。彼らは鉄のくちばしと鉄の翼をもつていて。このくちばしは大変に尖っている。人を襲撃することを常とするケレ（kellet の単数形）の人殺しが家にやってきて中へ入ろうとするとき、彼らはそのくちばしで攻撃し、ひどく傷つけ、そしてその両目をつぶす。彼の血は遠く荒野にまで流れていいく。それで彼は恐れをなして、逃げて行く。[Bogoraz: 498-499]

b. わたしは人間の家を閉じた鉄のボーラーにする。それには入口も窓もない、そしてあるのは天井のちいさな煙穴だけである。

わたしはこの穴の周りに鋭いナイフをおいた。どんなケレもそこから入ることはできない、死神はそれについて何も知りはない。夜寝る頃に何か惡ものが家を襲おうとする。あるものは「わたしたちをこの家に入れてくれ」、「そうだ、どうかそうさせてくれ」という。彼らは家の周りをめぐって入口を探す。入口はないので、彼らはそれを見つけることができない。「なんてこった。どちら側から試したらよからうか。大したものだ。わたしたちは入口を見つけることができない。下からやろう。外テントの地面からここへ入ることにしよう」。彼らは地面に潜るが、別の側に再び出てこざるをえない。入ることはできないのだ、家はすっかり鉄でできているから。彼らはもう一度表に現われる。「どこからやつたらよからう、またたく。人間どもの声が中でする。あそこだ。屋根に上がってみよう」。彼らの一人が屋根にのぼって、煙穴を見つける。「おお、見つけたぞ。試す場所があるぞ。さあ、きなさい。ロープをつけてわたしをこの穴から下へおろしてくれ」。彼らは彼を降ろすが、穴は狭く、鋭い刃物が取付けである。それは彼を傷だらけにする。血が噴ききて、腸までとびだす、彼は痛さに堪えることができない。「おお、おお、引き上げてくれ。死んでしまう。わたしの身体はずっかりぶつかり、裂けてしまった」。彼らはロープを引き上げる。彼の内臓と腸は全部外に出てしまい、そして彼

は血だらけだ。「ああ、行こう、これはひどいわ。わたしの身体はずたずただ。すんでのところで死ぬところだった。それはじめんだ」。彼らは獲物をすてて行つてしまふ。[Bogoraz: 499]

c むし、一人で眠るのが恐いと、わたしは次のよろこびへ。  
「わたしは雌犬の体の左半分を切り取つて、犬の血を手の掌にあつめる。この血のなかでわたしは眠る。わたしがどこにいるか誰か分かるかな」。[Bogoraz: 499]

d ひとりで寝ていてケレトが恐いときわたしは次のように語る。  
「わたしは小さな石になる。わたしはその石にはいる。それは海岸にある。風はその上を吹き、波はその上を洗う。わたしは安全だ」。小さな石を飲み込むのもよい。そうすればケレトがやつてきても、彼は海岸の小石のなかに人間をみつけることはできない。[Bogoraz: 499-500]

e 夜一人で旅をしていてケレトが心配なとき、わたしはレケン re'kken (身体の大きさが伸縮自在な精靈、ケレの一種) の喉を旅にもつていく。それは長い首をしている。そのなかに入つて旅をしていく。ほかのケレトはわたしを見つけることがで

きな。[Bogoraz: 500]

##### 家畜の群れを蹄の病氣から守る呪文

「わたしはペブリー川(天の川)の主に頼んで大きな鉄の箱をもつた。わたしはその中に家畜を入れ、それから鍵をする。彼(つま

りケン) せむうやつてそいく入ることがでようか」。[Bogoraz: 500]

##### 6 病氣治療の呪文

わたしは大空へ出た。家から少し離れたところに小丘が、草に蔽われた二つの小丘がある。その一つは手近にある。とはいへ、それは大して遠くはない。わたしは大空の遙か遠くにやつてきたと思った。手近なほうの小丘にぐつと近づくと、わたしは「今日は」と大声で語った。わたしはそれを自分が言つたのだが、まるで小丘がわたしに呼び掛けたようだった。そこでわたしは答えた。「いいや、それはわたしだ」「なんて素敵なこと。どちらから?」「いいや、わたしは下の人間(世界) からきたのだ」「なんて素敵なこと。何用でおいでなすった。おまえさんは大変な遠くからおいでなすつた」。わたしに話かけたのは小さなおばあさんだった。それはクチャネチャ Kuča-neča'ut といふ名の「最初の創造の女 a Woman of the First Creation」で、彼女は自分の家の内テントに座つていた。

もう一つの小丘は彼女の隣人、その場所の主人だった。彼女は沢山の呪文をもつた女で、その名はラウチヤナウト Raučha-na'ut だった。「もし、もう一人の女が何というか聞いてみましょ、ハウチャナウト、呪文の持ち主が。彼女のところへ行けばいい」。わたしは主人の家へ行きかける。またしても最初のときと同じ会話。「今日は」「どなた?」「いいや、それはわたしだ」「なんて素敵な

こと。どちらから?」「わたしは下の人間だ」、「なんて素敵なこと。何用?」「ああ、お聞きください。わたし共の人間が一人病氣です。彼はひどい重体です。そこでわたしは助けを求めてあなたのところへ來たのです」。「ほう、それはすばらしい。でもう一人の女は何と言いました?」「彼女は行つて主人が何と言つて聞きなさい」と言つた。「いかにも。わたしが出ていくまで待つていいなさい。」こんなに遠くまできて手振らで帰るわけにはいかないでしよう。

そこでわたしは小丘の天辺から一本の草を取る。それが一緒につれている年寄りのおばあさんであるかのよう。わたしたちは最初の家に戻る。「今日は」。今度はわたしたちは「一人だ。わたしの連れは「お母さん、わたしたちを行かせて下さい。この人が手振らで帰るわけにはいかないでしよう」と大声で言つた。「やれやれ、わたしを待つておくれ。出ていくわ」。そこでわたしはもう一本長細い葉をとり、両方を家にもつて帰る。まるでわたしが空の彼方の、とても遠くにから戻ってきたかのように。家内の者たちはわたしを待つてゐる。わたしは二人の女を病人のそばへ、その枕元へおく。翌朝、わたしたちは毛皮の端切れを入れた二つの小さな袋を用意する。少しばかりの脂身をそこへ入れる。わずかな腱糸もそれぞれの袋に入れる。これはおばあさんたちへの報酬の肉と皮紐である。そこでわたしは彼女たちを元の場所へ連れて行き、それぞれをそれぞれの小丘の家におく。それからわたしは大空の彼方から戻つてきたかのように帰る。[Bogoraz: 500-501]

b わたしが病氣になると、わたしは“朝焼けの右側”に援けを

c 人が病氣になると人々は“上界の人”を呼んでこのように話す。「降りてきてください。わたしは、あなたをわたしの“助手”として使いたい。実際、わたしはどうしたらよいのだ。どうでほかに助けを見つければよいのだ。わたしには分からぬ。あなたの許しをえて、わたしはあなたを“助手”にしたい。わ

たしの代わりに探してくれ。ここでわたしは全くの孤立無援だ」

そして、呪文を唱える男は、何か小さな物、例えば、木切れを拾い、それを“上界の人”とする。次いで、彼は“前の頭”((the Front Head=大角星)にトナカイの群れを要求して、次のように言う。「おお、前の頭よ、あなたの最上の雄トナカイをください。この方が自分のトナカイそりに使うでしょう」。彼はまたルルテンニン Rulte'nnin=オリオン座に鞭を要求する。その後、“上界の人”は搜索の旅に出発する。まずはじめに、彼は“地上の存在”を訪ねる。彼がそこに着くと、人々は「来ましたね」(だが、実際には男はその場所を離れてはない)と言う。「はい、来ました」「おまえさんは誰ですか」。「おお、わたしあたたか」助手に雇われたのです。わたしはあるの男がどこにいるのかを聞きに来たのです。あの男はきっとここにいるでしょう」「でもわたしたちはなにも知らない。それは全くの未知です。わたしたちは言うことができない」。そこで彼はそこを去り(もちろん男は動かずに立っている)、再び話はじめて言う。「おお、どこへ行つたものか。彼はどこにいるのか」。彼は“上界の存在”Girgo'l-va'irginの許へいく。「おおやつてきましたね」「はい」「何の用ですか」「わたしは捜索中です。わたしはあの人々の“助手”です」「なるほど。しかしわたしたちは知らない。その男はここには来なかつた。それはまったく分からぬ」「そうですか。しかし、彼はどこ

にいるのだろうか」。

彼は家に帰ると病人はもう死んでいた。彼は言う。「ああ、わたしは彼を見つけることができなかった。あそこの人たちは彼のことを知らなかつた。難しいことだ。どこにいるものやら。わたしは“暗闇”の人々のところへ行つて捜そう」。彼は“暗闇”へやつて来る。「来ましたね」「はい。おやおや、ここにいるのか」。ここでついに彼は搜索者によつて見つけられる。「あなたはここにいたのか」「そうだ、わたしはここに来た。ここでわたしは待つているのだ」「そうか、家へ帰ろう。わたしはあの人々の助手をしているのだ。確かに、このために彼らはわたしを呼んだのだ。戻ろう。わたしはあなたを連れて行く」。そして彼は本当に男をつれて行く。(そのため男はもう一つの小さな木切れを拾い、それを左手にもつ。これは“上界の人”が靈魂を連れて、同じ道を戻つて行くを意味している)。同時に呪文を唱えている者は病人の右耳に息を吹きかけ、頭を搔く。木切れは病人の枕の下におかれ。ついに死人は息を吹き返し、次いで声が戻り、それから起きて座ることができる。それから呪文を唱えている者は病人のための着物を朝焼けに要求する。彼は言う。「ここを見てください。この男は着る物がない、ここにいるわたしの子供は。着物をください、そうすればわたしが彼の身体に着せよう」(彼は上方から着物を取るかのように片手を上に伸ばす)。それから彼は着物を着せて言う。「わたしはあなたに(ケレによって)攻め

られない服を着せた。」その後、彼らは病人を家の中に戻す。

「というのは、最後のパフォーマンスのために彼は寝室から連れ出させていた。さて、彼らは彼を元の場所へかえす。家に入る前に、彼の全身には赭土（オーネル）が塗られなければならない。その後に彼は完全に回復する。[Bogoraz: 501-503]

d 人が病気になると、老いた熊があらわれる。それは最初の創造のときの大熊である。わたしは自分をその熊にする。彼は北极熊ではないが、その毛はぜんぶ真っ白である。わたしは自分の指を舐めまわし、その指で病気の男をつかまえる。男が痛みを感じる箇所をわたしはぎゅっと強くつかむ。それからわたしは彼の素裸の身体に強く息を吹きかける。[Bogoraz: 503]

e わたしが誰かの病気を治したいと思うとき、わたしはかれを

大地にかえ、わたし自身は大熊に変身する。わたしは強い。わたしは土をひっかき掘り、それをあたりに撒き散らす。そして、わたしは病氣を穴のなかに入れ、それを再び土で覆う。こうして、わたしはあらゆるものを見じこめる。[Bogoraz: 503]

f 「鳥のカルパイン」*Karpañin'* 鉄の大羽根、非常に鋭い羽根をもつたカルパインがきた。彼は病人の口に入り、彼のなを棲家とする。肝臓を点検し、それを鉄の鉤爪ではじくり、その上をおまえの鉄の大羽根でつつきまわす。病は首から、胸から、胃から、身体中から消え失せよ。その後、患者は身体全体に煤を塗るが、それは鉄の鳥の羽根なのだ。[Bogoraz: 503]

g 胃痛に對して。わたしはクウルキル *Kuulkil*（ワタリガラ

スの名）を呼ぶ。わたしのこの腹をわたしは海の入江にする。

その入江は凍つていて、すっかり氷に閉ざされている。たくさんの塵が入江の氷のなかに凍てついている。その塵はわたしの胃の病だ。「おお、おまえ、わたしの胃よ、おまえは痛みに満ちている。わたしはおまえを凍てついた入江に、悪い浮水原に、たいへん古い浮水原にしよう。ノオ」わたしはクウルキルに呼びかける。「汝、クウルキルよ、汝はたいへん遠い昔からこの辺りを旅している。わたしは汝の援けが欲しい。汝はこの入江をどうするつもりか。これは凍てついている。悪しき人々がそれを凍らせのだ。汝は鋭い嘴をもっている。汝はなんとする。」

すると、ワタリガラスは氷に穴を開けるが、実は、壊されるのは病氣なのだ。氷の下に張りついていたものを全部、わたしは運び去らせる。それは水面を流れていく。次いで、彼は援けを求めてきた男のところへきて、こう告げる。「わたしは仕事を終えた」「よろしい」。それでは、わたしは大海に呼びかけよう、『おお、海よ、汝は偉大だ。海辺に流れくる大川の向きを変えておくれ』。すると海から風が、大嵐が、大波がやってくる。わたしはおまえたち皆に呼びかける。彼は患者の腹の皮膚を摑む。呪文を唱る者はその両手を、あたかもその掌が大波であるじとくに、患者の胃に当てる。そして腹をもんで按摩をする。そうしている間、彼は唱える。「今やわたしは塵をぜ

んぶきれいに取りのぞく。わたしはそれを水によって運びさらせる」。そして、彼は後向ぎに倒れ、あたかも海からの大風が彼をさらって行つたかのように。その時、海は引き潮になり、潮位はもつとも低い。ずうっと昔からここにあつた小石（実は彼の腸）は水から剥出しになつてゐる。そのまわりには水がない。「わたしは、おまえたちを乾燥した場所にしよう。わたしはおまえたちを乾いた砂浜にしよう。一匹の毛虫が砂の上を這つてくる。それは地面から出でる塵をぜんぶその毛のなかに巻き込む」。その後、呪文を唱えるものは力一杯息を吹く。彼はその右手の掌に唾を塗りつける。彼は外から雪をもつきて、それを口のなかで溶かす。そして、彼は一枚の細長い草の葉をとつて、それを患者の首飾りに結ぶ。その後、彼は掌の唾を拭う。

そこで人々は支払いをする。彼らは小さな皮袋をつくり、その中にソーセージの幾切れか、皮の代用の枯葉、肉の小片と皮紐の小さな切れっぱしを入れる。シャマンはこれを全部持つて、家に帰る。彼は自分のテントの裏の供犠の場所へ持つていく。そこで彼はすべての物を取りだす。彼はソーセージにナイフを突き刺すが、そのソーセージは屠るべきトナカイである。彼は呪文の存在 Being of Incantation (ewga'nvu-vairgin) に皮紐、ビーズやタバコの犠牲を振り撒き、それから戻つてくる。夜になると、彼らは内テントに入る。翌朝彼らはもう一度病人を見舞う。「やあ、気分はいかが」。「確かに、わたしは少しよく

## 7

## 瀕死の人をつれ戻す呪文

a 人が死んだばかりで、遺体が室内にあるとき、別の者が荒野に出て行つて天なる存在 (Upper Being)、朝焼けに語りかける。彼は次のように言う。「わたしの心は定まらない。(迷うのは)たくさんだ。他の誰にわたしは助けを求めるべきなのか。あなたが最適者です。おお、わたしにあなたの犬をください。わたしはそれをわたしの犬として使いましょう。わたしは吾が子のことが悲しい。あの子は遠くへ往つてしまつた。だからあの犬をわたしの救いに使わせてください」。彼は左手であたかもどこからか犬を受け取るような仕草をする。それから彼はもどつてきて死者の片耳に息を吹きかけ、犬のように「ウゥ、ウゥ、ウゥ」と唸る。するとこの犬は死者を追い掛け走りだす。それは「ワン、ワン、ワン」と吠えたり、唸つたりして彼を追う。まもなく犬は彼を追越し、道の上で激しく吠えながら彼に向きあう。それは彼に咬みつき、どちらへいこうが彼の行き先を遮る。遂に犬は彼に長い道程を引き返させる。そこで彼はまた身体のなかに入り、それを身に着けなければならぬ。その後は

oraz: 503-504]

息をしあじめ、死んではいるが、だんだんに回復して、再び生き返る。[Bogoraz: 506]

b もし、わたしが、人の逝くのを遅らせたいと思えば、わたしは、五本指のうちの小指を、死につつある人に変え、それをしっかりと手のなかに握る。彼が外に出ようとなれば、わたしはその道を遮る。わたしは、犬のように吠えて彼を戻らせる。わ

たしは彼の魂を流木に変える。わたしは強風となって吹き、それを岸辺に寄せ、わたしの息で陸へ向かって「カモ、カモ、カモ」と押し上げる。わたしは、その木の根元を掘んで、岸に引き上げる。[Bogoraz: 506]

c 病人が全く弱ってきて、死にそうになると、彼を家から運びだし、その身体をなにかで、例えば、雪で擦る。それから他の者が上界に向かって話かける。彼はペブリ川（天の川）に呼びかけて、次のように話す。「おお、ペブリ川よ、降りてきてくれ。わたしは汝を助手に使いたい」。同時に、彼は東風にも呼びかける。すると土砂ぶりの雨が降る。川は大いに増水する。患者は急流となり、すべて運び去られる。彼はすっかり清浄になり、水は全部の塵をもち去る。そうすると、病人は快方に向かい、家のなかへ連れ戻される。[Bogoraz: 506]

8 書を及ぼす呪文  
わたしの怒りをかった者へはだれであっても、わたしは言う。  
「おまえは人間ではない。おまえは古ぼけたアザラシ皮だ」。わたし

は海から小エビを呼ぶ。「おお、小エビよ、この皮を引っ搔いて、穴だらけにしろ。おまえの怒りが、わたしの怒りのようになくなれ。秋がくる前に彼を急いで滅ぼせ」。実際に彼は数日のうちに死ぬ。[Bogoraz: 506-507]

## 9 愛の呪文

a もし、わたしが、女を好きになると、わたしは絶えず彼女を追う。彼女が小用をするとき、わたしは尿の落ちるのを見て、言う。「落ちているのは尿ではない、それは、あなたの心臓と肝臓と腎臓が一緒に落ちているのだ」。わたしは朝焼けのもとへ行き、鉄の滑り止めのついたブーツをくれるよう頼む。そのブーツを履いて、わたしは、彼女の心臓と腸の上を踏みにじり、鉄の滑り止めで傷つける。そうすると、彼女はわたしに好意をもち、彼女の心はそれで傷つくだろう。[Bogoraz: 507]

b もし、わたしが、この女を欲しいと思えば、わたしは、彼女の心臓と肝臓を持って夜の「方角」へ行く。そして、彼女の内臓を「夜」の両側へ吊す。それから、わたしはいう。「ここにあの女の心臓と肝臓がある。それらをアザラシの網に絡ませよ。彼女を内臓抜きにせよ。わたしへの思慕で彼女をやせ衰えさせよ。この男はおまえの夫ではない。これは海岸に流れついて、小石のうえで朽ちているアザラシの骨だ。風はその上を吹き、その骨は剥出しだ。そしておまえは女ではない。おまえは若いトナカイの雌だ。死肉の臭いがおまえのほうにやってくると、

ヌルガラスナ。ルシトわたしのものにばら。 [Bogoraz: 507]

pology. Oxford. 1914

10 ワタリガラスの呪文  
かのワタリガラスは、野に死肉があるのを見つける。「仲間を呼  
んで」。わたしの見つけた獲物は、全く動かないよだ】。大  
勢のワタリガラスが死肉へやへとおい、その上に降りる。「ルンド  
止まりなさい。いいへ親方におこで願おう。」親方、かのワタリガ  
ラス親方がへぬ。「わたしは畠田の周りかいはじぬよハ」。(彼は降  
りて、両袖をまくつ上げ、ナイフを取りだす)。他のワタリガラス  
も同様にする。彼らのナイフは太陽にあらめぬ。 (しかしながら  
ふ、それは、ワタリガラスのくちばしに過ぎだ)。

わたしは魔法の輪なわを拡げる。それには一本のナイフが絡ませ  
てある。しかし、それもワタリガラスのくちばしなのだ。かのワタ  
リガラスは、それを取り戻そうとする。【わたしのナイフを返せ】  
と彼は言へ。「ナイフがなくつむかへて生がねよハ」。ひいろが、  
実はそれは彼のくちばしのひと。「わたしのナイフを返せ。わたし  
のたつた一つのナイフを】。「ねたしほ返せん】。「それを買ひ戻すに  
は何を貰えればよからうか】。「某の男に効能田のあゆ力をくれ】。  
するとい、かのワタリガラスはナイフを取り戻すため、わたしが自分  
の両脇に使えるように、彼の呪文の一 いおへおぬ。 [Bogoraz: 508]

tion, Memoir of the American Natural History, Vol. 7)  
New York-Leiden, 1904-1909  
W. Jochelson *The Koryak* (The Jesup North Pacific Expedi-  
tion, Memoir of the American Natural History, Vol. 6),  
New York-Leiden, 1908  
I. S. Vdovin "Chukotskie shamany i ikh sotsial'nye funktsii".  
*Problemy Istorii Obozhestvennogo soznanija aborigenov*  
*Sibiri.* Leningrad. 1981. p. 178-217

(ヌルガラスナ) — 湘南国際女子短期大学)